

## 異文化経営学会賞

2014 年度学会賞は下記の 2 名に授与されました。

### 著書部門

古沢昌之（大阪商業大学）

『「日系人」活用戦略論：

ブラジル事業展開における「バウンダリー・スパナー」としての可能性』

（白桃書房 2014 年 1 月 17 日）

### 研究発表部門

佐脇英志（株式会社キトー経営管理本部担当部長（当時））

「異文化における経営再建のケース・スタディー—シンガポール印刷工場の体験—」

（2013 年 11 月 23 日発表）

## 学会賞 講評

学会賞委員長 藤澤武史（関西学院大学）

### 著書部門

同著書の独自性は、ブラジル事業展開に日系人を活用するという「バウンダリー・スパニング(境界架設機能)」を切り口にした鋭い洞察にある。ブラジルにおけるアンケート調査など現地調査と日本でのブラジル日系人の出稼ぎ調査をふまえ、「バウンダリー・スパナー」の役割の重要性を証明した点に貢献が認められる。日系企業によるブラジルへの進出や同市場開拓の重要性から鑑みても、またバウンダリー・スパナーとしての可能性がアジアなどにも応用できるという意味でも、異文化経営の視点に立つ本格的な研究成果である。

### 研究発表部門

同研究発表者は、シンガポール印刷会社の社長として同企業の再建を任された経験を、具体的かつ分析的に発表した。社長として文化的背景の異なる社員とどう接するか、ひとりひとりの痛みをどう理解するかなど、心を感じさせるマネジメントが随所に見られた。南オーストラリア大学で経営学博士号を取得されただけに、異文化経営論の実践に理論的な示唆が随所に織り込まれ、バランスが取れた研究成果に仕上がっていた。しかも熱のこもった発表であったため、会場で多くの質問が寄せられ、活発な討論が行われた。

## 受賞のことば（著書部門）

古沢昌之（大阪商業大学）

このたびは「異文化経営学会賞」を頂戴し、大変光栄に存じます。

拙著『「日系人」活用戦略論—ブラジル事業展開における「バウンダリー・スパーナー」としての可能性—』は、私が20年以上にわたり取り組んできた「日本企業の国際人的資源管理に関する理論的・実証的研究」の成果の1つで、従来型の「本国人駐在員か、現地人か」という二分法的な視点を超克して、日本企業の新たな人材オプションとしての「日系人」の活用について考察したものです。具体的には、副題が示すように、150万人という世界最多の日系人を擁し、BRICsの一角として注目を集めるブラジルでの事業展開を念頭に、日系人の「バウンダリー・スパーナー」（日伯文化の橋渡し役）としての可能性について研究を行いました。

研究方法に関しては、「文献研究」からリサーチクエスションを導出して、アンケート調査とヒアリング調査で検証するというスタイルを取っています。また、日本企業と欧米企業の「比較研究」という視点も織り込むよう努めました。アンケート調査につきましては、在ブラジル日系進出企業、在日日系人、さらにはサンパウロ大学の日系人学生を対象とした3つの調査を実施しました。一方、ヒアリングに関しては、3回にわたるブラジル現地調査と日本各地の日系人集住地での調査を行いました。ブラジルへは片道30時間を要する長旅でしたが、サンパウロやリオデジャネイロ、そしてアマゾンのマナウスでも、日系人団体や進出企業の方々から温かいご支援をいただきました。また、日本における日系人集住地の調査では、群馬県・大泉町、愛知県・豊橋市、岐阜県・美濃加茂市、滋賀県・愛荘町等を訪問しました。

このように、多くの方々にお支えいただき、本書は誕生しました。私としては全力を尽くして書き上げたつもりではありますが、今読み返してみますと、もっとこうすべきであったと思う箇所もございます。そうした中、今回このような名誉ある賞を頂戴しましたので、これを励みに一層の研鑽を重ねてまいりたいと思います。最後になりましたが、馬越会長、学会賞委員会の先生方、会員の皆様方に対し、改めまして厚く御礼申し上げます。本当に有難うございました。

## 受賞のことば（研究発表部門）

佐脇英志（株式会社キトー、タイ現地法人副社長）

異文化経営学会設立 10 周年記念として設定された「異文化経営学賞」の第二回目の学会賞「発表の部」の受賞という大変な名誉を頂き、唯感激しております。実に、私のような、大学教授でもなく、一介のビジネスマンがこのような大賞を頂き恐縮しています。

私の発表題目は、「異文化における経営再建のケース・スタディーシンガポール印刷工場の体験」で、不況業界である印刷工場での海外での企業再建の経験をまとめたものです。私自身 CEO として、シンガポールの会社に送り込まれ、多民族従業員のモチベーションを上げて事業再生していく過程を学術的に発表したものです。海外事業再生という希少ケースの実体験とアカデミックな分析的考察が評価されたとのことでした。

私自身、1991 年より、タイで 5 年、シンガポールで 1 年 + 3 年、マレーシアで 8 年、そして現在タイでさらに 1 年の足かけ 18 年の海外駐在を経験してきました。その際、特に実感したのは、グローバル化の波の中で日本企業がどんどん弱くなっていくということです。なんとしても欧米の経営手法を勉強しなければと、1999 年から夜学で勉強し、イギリスの MBA、オーストラリアの経営学博士をとりました。その最大の関門である博士論文で悩んでいた時に、この異文化経営学会に出会い、入会しました。2004 年 1 月のことでした。海外経営をこういうアプローチで考えることができるのだと、目の前が一気に開けたのを今でも覚えています。

それ以来、本学会員の末席に加えて頂いておりますが、最近特に考えるのは異文化経営学会が、「研究者と実業者の出会いの場」であり、「自分の研究と自分の経験を持ち合う切磋琢磨の場」であるということです。

我々学会員の使命とは？ 研究者（Researcher）は、この学会を通じて、今現実の世界で行われていることを吸収し、現実を見ることによって新しい仮説を作ります。この仮説を、フィールドリサーチでテストし新しい理論を構築しこの学会に持ち帰って発表します。

一方、事業者（Businessman）は、学会で学んだ理論、実例を吸収し、現場、即ち自分の会社で実践してみることです。そして、効果があるかしっかり見極め、その結果を学会に持ち帰って発表することです。このことを、研究者と事業者が協業することにより、異文化経営学会はますます発展していくと考えます。

異文化経営学会がますます発展し、国際社会で活躍する研究者と事業者の両者の未来を照らす光であり続けることを願ってやみません。